看護大学における協調自律学習の可能性

Possibility of Collaborative and Autonomous Learning in Nursing University

○寺谷　愉利子[1)]　　望月紫帆[2)]　　東郷多津[3)]
TERATANI Yuriko　MOCHIZUKI Shiho　TOGO Tazu
[1)] 佛教大学大学院　[2)] NPO 法人学習開発研究所　[3)] 京都ノートルダム女子大学
[1)] Bukkyo University　[2)] Institute for Learning Development　[3)] Kyoto Notre Dame University

要約　看護基礎教育の高等教育化が顕著である一方、学生の学習力の低下が問題視されている。また、学ばなければならない新しい知識や技術が増え続け、看護大学における多人数での一斉授業についていけない学生の問題は大きい。本稿では、学習支援システムを活用しながらプロジェクトチームで協調自律的に教材開発を行った経験と、看護大学での授業の一事例そして本テーマに関連する文献から、看護大学における協調自律学習の可能性について考察した結果を述べる。

キーワード　看護基礎教育　協調自律学習　チーム学習　多人数教育

１．研究の背景と目的

近年の看護学教育における高等教育化は顕著である一方、他分野同様学生の学習力の低下が、問題視され、また学ばなければならない新しい知識や技術も増え続けている[1)]。そして看護大学においては多人数での一斉授業が主流であり、学習についていけない学生の問題は大きい。

NPO 法人学習開発研究所（代表：西之園晴夫、以下、ILD と略称）では、高等教育の卓越性と普遍化に対してチーム学習による協調自律学習を開発している[2)]。本稿では、ILD の枠組みと学習支援システムを活用しながら、自ら表明したエフォートレベルに従いプロジェクトチーム形式で協調自律的に教材開発を行った経験[3)]と、看護大学での授業の一事例そして本テーマに関連する文献を用いて、看護大学における協調自律学習の可能性について考察した結果を述べる。

２．看護大学の授業事例

１）情報収集者：病院看護師を経験後、私立看護大学の教員 2 年目の研究者が情報を収集した。

２）事例対象：研究者が担当するオムニバス方式の科目を受講した学生 91 名を対象とした。対象者の学生には口頭、紙面により初回授業時に研究参加の同意を得た。

３）調査項目：①授業（90 分）3 回の録音記録、②授業毎の学生の「授業評価票（毎回の授業に関する意見、感想、要望等の自由記載）」、③授業科目の試験結果。

４）学生像：学生は入学時より、国語、英語、数学などの基礎学力に幅があることが指摘されていた。そして学生は大まかに、①教員の指示がなくても自己学習し、必要時教員に質問に来る、②教員からの介入があると学習する、③教員が介入しても学習しない・できない、の３タイプに分けることができる。必修の科目学習状況をみると、特に②③のタイプの学生の評価は低く、③のタイプの学生の一部は再履修判を受けている。学生は全般的に大学内や臨床実習施設で、すなおであると評価を受けているが、授業中のいねむり、私語、遅刻などがみられていた。

５）授業のねらいと方法：１年次履修済みである専門基礎分野は特に重要であり、科目責任教員からそれらの教科の復習に重点をおくよう要請があった。そこで教本の四半分の内容をアレンジしてパワーポント教材を作成した。そして授業中、学生にマイクをまわすことで授業に参加し、いねむりや私語を減らそうと試みた。また「授業評価表」の記載に対し指示を出した。その内容は毎回異なり、「紙面による研究同意確認」、「前回授業中に指示した参考資料の訂正の確認」、「前回授業に出した学習課題の確認」とした。

６）授業の結果：授業の出席率は 93～100％であった。各授業では、97～100％の学生が意見等を記載した。研究者の指示に対して記載のない学生も若干いた。そして、「むずかしい、早すぎる、分からない、早口だ、今回の資料は良く分かった、パワーポイントの資料を全部ほしい、マイクをま

わすのはおもしろい、マイクをまわして意見を待っているのは時間がもったいない、1 年の時に習ったことなのに忘れていたのでもう一度勉強します....」などの意見が記載されていた。

7）前期試験：重要知識習得の確認を試験のねらいとして、看護師国家試験形式（4 択）10 問と記述形式１問を作成した。記述問題の内容は、授業の 30 分を使って、学生が考え、答えを引き出したものの確認である。試験結果は、記述問題の白紙解答は全体の 15%であったが、記述問題の正答率は４択問題より多かった。

8）看護領域の試験評価：①必須授業の単位未履修の存在　②試験放棄　③漢字が読めない・書けない・意味が分からない、文章が書けない　④教員が求めている要点が分からない　⑤話し合えない　⑥勉強嫌い（学生の言い分）、⑦生活態度ができていない等々の学生の問題が看護教員間で挙がった。

３．関連文献

本論文のキーワードを「医学中央雑誌（医中誌 WEB）」で検索した結果、「看護基礎教育」・「協調学習」で１件ヒットした。それは、協調学習の推進における、電子掲示板による学習ディスカッション（解剖･生理学に関する WEB Forum）の有用性[4)]を述べたものであった。

「看護基礎教育」・「グループ学習」に関連した 12 文献では、グループ学習は、医療安全教育、看護理論、事例演習、生活援助技術、実習後の総合学習や学生間討議などの授業にグループ学習を取り入れると効果があり、適切な介入のタイミング、他の教員との協働、学生の目標設定、グループ編成などの課題の提示があった。

「クループ学習」で討議をとりいれることは、学生の主体性・自発性の発揮をねらった講義の活性化に有効[5)]である。また、西之園[6)]は多人数の教職科目教育方法学の開発をグループ学習から開始した。そして８年経過した現在、個人プレーの通用しない「チーム」で学ぶことを重要視し、多人数の学生が協調しながらそれぞれの役割の中で展開するチーム学習の教材を開発している。また授業分析から、チームメンバーがよりお互いを受け入れることができるしかけとして、コミュニケーションタイプ調査（株式会社コーチ A）、チーム分け、役割分担、アイスブレーキングや C-Learning（株式会社ネットマン）を教材に取り入れている。

４．まとめと今後の課題

1）事例の解釈：調査項目は十分分析できていないが、教員の授業方法や教材の工夫で学生の試験評価や学習意欲が向上することを実感した。しかし現時点の学生像から、大学卒業時の看護師国家試験に対する課題点も見られる。その対策として、学生が生き生きと学習する臨床実習に注目する。授業で吸収できなかった知識は、実習の場で生きた知識として補うことができるのではないか。看護大学では３・４年の通年で学生をグループに分け、大学から離れた実習施設で臨床実習を行っている。臨床実習は遠隔学習であるが、協調自律学習の良い機会でもある。

2）看護基礎教育におけるグループ学習の問題：授業演習のグループ学習に参加して、①司会・記録役割以外の学生は主体性・自発性を発揮していない。②参加している教員間の教育的合意がない。③その場だけのグループのため、学生間、教員間、学生－教員間のコミュニケーションがとりにくい、④多人数の教員の要員が必要、の問題点を研究者は挙げる。故に、個人プレーの通用しない「チーム」で学ぶほうが学生は自ら学ぶのではないかと考える。

3）看護大学における協調自律学習の可能性：卒業時に看護師ライセンスを取得し、臨床現場で主体的・自主的そして協調的に看護力を発揮するには、教師の知識伝達能力よりも、学生が自ら学ぶための枠組みが求められる。多人数で遠隔学習に有効な学習支援システムを使ったチーム学習を授業演習や臨床実習時に取り入れるため、以下2点を提案する。

①ILDプロジェクトチーム員である筆者が中心となり、複数の看護大学教員の活動参加を得て、看護大学独自の「協調自律学習」を開発する。

②「教員が介入しても学習しない・できない」学生を主な対象として教材開発し、質的研究を用いて対象となる学生の「学び」のプロセスを知る。

参考文献

1）高橋照子(2006)、「看護教育と学習力」、日本看護学教育学会誌第16巻第2号

2）西之園晴夫(2007)、『学習ガイドブック　教育の技術と方法　チームによる問題解決のために』、ミネルヴァ書房

3）東郷多津、他(2007)「英語を学習する意味が見いだせない学習者のための自律学習の開発方法（２）－「学習マップ」の導入効果と問題点－」日本リメディアル教育学会第３回全国大会

4）藤本悦子、他(2005)、「医療従事者養成教育におけるWEB Forumの有用性　学生主体型の協調学習の構築に向けて、形態･機能第4巻第1号

5）村本淳子(2001)、『わかる授業をつくる看護教育技法２　討議を取り入れた学習法』、医学書院

6）上掲